

批評と紹介

陳高華・陳智超等著

中国古代史史料学

山根 幸夫

最近、中国では文史、あるいは文史哲に関する多数の工具書が刊行されている。本書もまた工具書の一種には違いないが、中国史、特に中国前近代史を対象としたものであり、従来中国ではこれに類する工具書は存在しなかった。わかりやすく言えば、中国前近代史に関する史料・史籍解題ということになる。

本書の執筆者は、中国社会科学院歴史研究所のスタッフが中心になっているようである。まず、最初に本書の章別構成を示しておきたい。

- 第一章 商殷史史料（齊文心）
- 第二章 西周春秋戰國史史料（劉起鈇）
- 第三章 秦漢史史料（吳樹平）
- 第四章 魏晉南北朝史史料（張沢咸）
- 第五章 隋唐五代史史料（張沢咸）

批評と紹介 山根

第六章 宋史史料（陳智超）

第七章 遼金西夏史史料（陳智超・陳高華）

第八章 元史史料（陳高華）

第九章 明史史料（曹貴林・鄭克晟）

第十章 清史史料（郭松義）

右の章別構成で、注目すべき点は、わが国では秦以前は一括して先秦時代とする処が、殷代と周代（春秋・戦国を含む）に区分され、二章に分けられていること、五代が「隋唐五代」として前代に含まれていることである。勿論、清史は一九世紀半ばまでである。

各章ごとに多少記述の仕方は異なるが、ほぼ共通していることは、最初にその時代の史料に関する「概況」を述べ、次いで「基本史料」について解説し、更にその時代に関連する主要な「其他史料」について説明を加えている点である。その他、各時代によって、特徴的な史料にも言及している。例えば、第一章では甲骨文資料について別に一節を立て、第二、第三章では、考古文物史料、考古資料について別に一節を立てている。その他、第八章では「国外史料」なる一節を設け、波斯史料、欧州文字史料、アラビア史料、朝鮮史料、越南史料についても解説している。特に欧文史料に関して詳細である。第十章でも「国外資料」に論及し、朝鮮史籍および越南史籍中の中国資料、日本資料（付琉球資料）、欧州等

西方国家の資料について解説している。因みに、日本資料に関しては、『華夷変態』『韓姫漂流記』『歴代宝案』について解説すると共に、琉球使臣の日記や詩文集をも紹介する。なお、第十章について特徴的なことは、「檔案資料」なる一節を設けていることである。日本の研究者もよく知っている通り、清代に関しては龐大な檔案類が存在し、それは清史研究の最も基本的な重要資料である。

ただ、我々にとつては中国の檔案資料の実態を把握することは、なかなか容易なことではない。此処では、中国第一歴史檔案館（北京）保存の清代檔案、および遼寧省檔案館所蔵の清代檔案、更に四川巴県檔案、曲阜孔府檔案について解説を施している。殊に第一歴史檔案館の資料について詳述しており、清代檔案の概要について知るためには、すこぶる要領の好い叙述である。なお、第九章でも檔案資料について述べられているので、併せて参照すべきである。

さて、筆者の専攻する「明史史料」について述べた第九章について、もう少し詳しく紹介してみたい。まず「概況」では、明代史料の特色として、次の四点を指摘する。

(1) 私人の著述が多く、大部分の史籍は正徳以後の私人の著述で、同時に一連の知名な史学家（鄭曉・王世貞・焦竑・胡心麟・何喬遠・陳仁錫・談遷等）を輩出した。

(2) 史学の著作の量が浩繁であり、官修の書籍は、李晋華

『明代勅撰書考』によれば、二百余部にのぼる。私人の著述については、正確な統計はないが、文集だけについてみても、『千頃堂書目』に五千人に近い別集が著録されている。

(3) 体裁は相当完備しており、紀伝体・編年体・紀事本末体・雜記・志書・輿図・類書・叢書など、無いものはない。

(4) 内容はすこぶる豊富であり、社会経済・典章制度・政治事件・農民起義・民族関係・対外関係・思想文化・科学技術など各方面の史料を包含している。

次に「基本史料」については、最初に『明実録』を解説しているが、台湾中央研究院歴史語言研究所から、黄彰健等の校勘した影印本が刊行されていることを明記しているのは、好ましいことである。なお、本書では必要な場合、各処に台湾の出版物も掲げている。学術上からいって当然の事かも知れないが、歓迎すべき傾向である。ただ、中国国内に果してどれだけ台湾本実録が輸入されているのであろうか。

『明実録』に次いで、『国権』『明通鑑』『明史紀事本末』『明史』『明会典』が挙げられているが、我々から見た場合、『明通鑑』や『明史紀事本末』をこれほど重視すべきか否か疑問を抱く。なお『明史』『明史稿』の解説につづけて、明史の編纂と考訂に関して、参看すべき明・清人、および近人の著述が列挙されているのは便利である。明人の著述には、黄景昉『国史唯疑』（伝抄本）、潘耒章の『国史考異』功順堂

叢書本)、および『明史考証扶微』(台湾学生書局一九六八年版)が挙げられ、最近の著作としては黃雲眉『明史考証』が挙げられている。

続いて、明人の史学著作として『弁州史料』『國朝典故』の両書を解説している。勿論、両書とも明史研究の重要な史料ではあるが、これと同等の、あるいはそれ以上重要な史料もあることを否定できない。更に、南明史事に関する史籍として『南疆逸史』および『小腆紀年附考』の両書を掲げる。

第三節「其他史料」では、まず紀伝体史書として『吾学編』『西園聞見錄』『名山藏』『春明夢余錄』『罪惟錄』『明書』を挙げる。『罪惟錄』に関しては、四部叢刊三編本にはふれているが、鉛印本について述べていない。第二に編年体として『憲章錄』『皇明大政記』『昭代典則』『皇明通紀』に関して簡単な解説を施す他、『大学衍義補』『皇明史竊』『明政統宗』『明大政纂要』『統藏書』の書名を列挙している。更に一朝の史事を記したものとして、永樂朝に関する『文廟聖政記』(杭州図書館、北大図書館明抄本)、洪熙朝に関する『仁廟聖政記』(北京図書館藏抄本)、宣德朝に関する『宣廟聖政記』(北京図書館藏抄本)、万曆朝に関する『万曆起居注』(天津市図書館藏明抄本)などの貴重本をも紹介している。

第三に、各種專題性史料を紹介するが、史籍名を列挙するのみで、解説はまったくない。農民起義に関しては、かなり

批評と紹介 山根

多数の史籍名が列挙されている。又、中国周辺の少数民族、および明朝と少数民族の関係を扱った史料を紹介する。また、明清関係問題の史料、次いで蒙古族および明・蒙関係史料、回族・維吾爾族に関する史料、藏・苗・瑤・彝・壮等の諸民族に関する史料、東南地区の黎族史料を挙げる。最後に、明代の対外関係史料として、『殊域周咨錄』『東西洋考』『鄭開陽雜著』などに解説を加える他、やはり多数の史籍名を列挙する。

第四は「政書」で、これは社会経済面と政治法律制度面の両者に分け、前者では『山東經会錄』や『欽依兩浙均平錄』(尊経閣文庫藏)をはじめ、官手工業・漕運・塩政・馬政などに関する史籍名を紹介する。後者では、『皇明祖訓』『大誥』『大明律集解附例』に解説を施す他は、やはり書名を掲げるのみである。

第五は伝記と年譜で、『國朝獻徵錄』に解説を加える他は、『八十九種明代伝記綜合引得』や『明人伝記資料索引』など、明人の伝記を調査するための索引類を掲げている。筆者の纂編した『日本現存明代地方志伝記索引稿』まで挙げられている。

第六は奏議と文集で、前者については『皇明条法事類纂』(東大蔵旧抄本)と『皇明經世文編』に解説を加える他は、史籍名を列挙するのみである。文集については、張居正の

『江陵張文忠公全集』に解説を施すのみで、他はすべて書名列挙するのみであるが、代表的な文集はほとんど網羅されている。件数にすれば約一六〇件にのぼっている。その殆んどが刻本または影印本で、台湾の『四庫珍本』本もよく収録されている。抄本は僅かに『楊文弱先生集』一本を見るのみである。

第七の「筆記」には、四庫分類の雜史と子部雜家類の書を収録している。やはり具体的な解説は加えていないが、『草木子』から『日知錄』に至る、約六〇件の書名列挙している。最も一般的な筆記を、初学者のために紹介したものである。

第八は「地志」で、初めに『大明一統志』『広志釋』『天下郡国利病書』『読史方輿紀要』に解説を加え、次いで所謂地志（通志、府州県志など）について詳細な総合的解説を試み、地志の史料としての有益性を説いている。最後に商業交通用書としての『一統路程図記』『商程一覽』『水陸路程』『士商類要』などの諸書や、山川・名勝・寺廟・水利に関する專志のあることも付加している。

第九は「内閣大庫明檔案」で、その多くは現在中国第一歴史檔案館に収蔵されているものである。言うまでもなく、明檔は清檔に比べれば量的に僅少である。なお、遼寧檔案館にも相当量の明檔が収蔵されているようである。これらの檔案

を整理・刊行したものである。『明清史料』『明清内閣大庫史料』『明末農民起義史料』『明清檔案存真選集』『清代檔案史料叢編』などに解説を加えている。

第十は文書・契約書・碑刻などの文物資料で、すこぶる多岐にわたっている。例えば、洪武四年の徽州府祁門県の戸帖について、かなり詳しく説明している。又、民間の土地・房産の売買契約書のサンプルを何点か紹介している。その他、碑刻類の蒐集・整理が盛んに行われていることをも述べている。これらの資料に関して、この様に簡明に紹介がなされていることは、初心者にとっても非常に便利であろうと思われる。

第十一は、思想文化と科学技術に関する著述の紹介であるが、これは頗る簡単な叙述である。最後の第十二は、書目と叢書で、此処では明代の代表的な書目および叢書が紹介されている。これ第三節は完了する。

以上、紹介したように、曹貴林および鄭克晟両氏の執筆に係る第九章では、実に多量の史籍が紹介されている。殊に第三節「其他の史料」は実に五〇頁に及んでおり、第九章の八割近くのスペースを占める。本書の他の章で、これほど多数の史籍名が紹介されているものはない。執筆者の方針によって、この様な叙述方式をとることになったものであろう。一見、繁雜にすぎるとの感を抱く読者もあるかも知れないが、

よく考えてみると、これだけ多数の史籍を提示されたことは、明代史の研究者にとっては、どれだけ大きな恩恵であるかわからない。解説がなく、書名が示されているのみでも、それを基にして自ら探索すれば得る所大きい筈である。中国前近代史を研究する学徒にとって本書は、すこぶる便利なハンドブックであるが、殊に明史研究者にとっては、より一そう有益な工具書である。わが国なるべく多くの研究者によって、本書が活用されることを望んでやまない。

最後になってしまったが、第九章の執筆者の一人、曹貴林氏より去る七月下旬に、筆者は本書を恵送された。曹氏は歴史研究所の研究員で、これまで明代史に関する多数の論稿を発表している、博学の明代史家である。曹氏の深い学識と鄭克晟氏の協力によって、本章が完成されたに違いないと確信する。

(A5判、四七六頁、北京出版社、一九八三年一月刊)

〔追記〕

本稿を起草した後に、南開大学歴史系の鄭克晟氏からも本書を寄贈された。曹・鄭両氏の御厚情に心より感謝する次第である。

王德毅・李栄村・潘柏澄編

元人伝記資料索引

大島 立子

一九七九年の第一冊目の刊行より以来、久しく待たれてきた王德毅・李栄村・潘柏澄編『元人伝記資料索引』(以下王氏等編)が、ようやく今春、第五冊目の発行をもって完成した。

元史研究にとって、多大な便宜をもたらすであろう本書の刊行は喜ばしいことである。王氏自らが、その序に「俗語云『工欲善其事、必先利其器』。索引便是研究学問的一種利器、可以幫助研究者用最少的時間獲最多的史料」と述べているが、本書もまた利器としての機能を充分に果し得るものである。本書の編纂は一九七五年にはじめたと言うが、短期間に多量な史料を使い、大部な索引を完成させた編者諸氏の勞をねぎらいたい。

元人の伝記索引は、既に各種出版されている。最初に編纂されたのは、哈仏燕京学社引得第三五号『遼金元伝記三十種綜合引得』(一九四〇年。東方学研究会日本委員会再印、一九六〇年)である。本書は、遼・金・元代に関する主として官